

台湾佛教を支える信仰者たち

——台湾レスキュー隊来日——

石原 顕 正

二〇一一年三月十一日。

東日本大震災の発生は日本にとって予期せぬ事態でした。

午後二時四十六分 大きな揺れを感じ、この地震による、大津波により、被害は東北沿岸部に及び大惨事となりました。大きな揺れを感じ、この地震による、大津波により、被害は東北沿岸部に及び大惨事となりました。

私の寺では、該当地域の日蓮宗寺院への安否確認を実施するため、情報収集を開始しました。現地の状況の把握は困難を極め、次第に被害が拡大していった。

首都圏も、ほぼ全面的に交通機関が止まり、「帰宅困難者」があふれ大混乱となった。

十三日 ふいに、一通の電話。

相手は、二十年來の友人である中国人二胡奏者「程農化」と「二胡と声明」のプロデュースをしていた、東京池袋・文扇堂店主 長瀬澄子氏からでした。

「台湾から来日したレスキュー隊三十五名が被災地へ向かうことが出来ず、都内で足止め状態になっているそうです」と日台交流協会渉外担当顧問の小笠原弘晃氏を紹介され受入れを依頼された。

日本側の派遣要請を待たずに台湾から成田に到着した、台湾NGOレスキュー隊三十五名が、大型バス二台で緊急避難的に台湾東京佛光山寺に留まっている』との内容だった。

「一刻も早く現地に向かい救助活動を行いたい。なんとか受け入れて欲しい」

「公的機関はじめ、政治的にも八方手をつくしたが受入れがありません」との依頼。

私は「人道支援ですね」と確認して、受入れを承諾しました。

十三日一報が入り 十四日 終日

どこに、どうやって問い合わせ、どんな書類の申請をすればいいのか。

現地との情報が途絶し「どうなっているのか、まったくわからない」状況の中で、いったいどこに向えばいいのか。報道では、現地では燃料等が大変不足しているとの情報もあり、バスの燃料や現場拠点はどこにするのか。など、すべて自らの判断に託された。

こうして、被災地への通行許可書を持参し、大勢の法師さんや信者さん達に迎えられ、東京佛光山寺に到着した。以前にも、本栖寺において多くの法師さんが女性出家者であることは認識していたが、台湾佛教を支える女性の数の多さに改めて驚いた。

さらに台湾からの大量の支援物資が到着。(10tコンテナ)受け入れ、被災地への手配、配送等にあたる。この大量の救援物資は台湾国内の仏教寺院を中心に出家者、信者、市民の「慈善」の行動であり、日本に向けた輸送システムの迅速さを目の当たりにする。

国境や組織を越えた連携の必要性が高まる中、海外からの支援を受入れ「調整」現場のニーズに応じて、被災地に「つなぐ」ことが出来るかが鍵となった。

その後、Earthの「調整」により東北への炊き出し支援を始め、地元高校への奨学金の提供や台湾南華大学への無償留学を実現した。

この佛光山寺は台湾最大の佛教寺院として最も早くに創立し、分院、信徒組織、事業団体も最大規模である。今回共に、東北の支援をする中で、法師さんを先頭に多くの信者さんたちの「慈善」の行為を目的の当たりにした。

信徒組織、国際佛光会は、全世界の会員数約六百万人といわれ二〇〇三年国連の正式な要請により国連経済社会理事会の非政府組織（NGO）会員となる。

佛光山の星雲大師は単身、台湾に渡り、貧困青年学僧であったにもかかわらず、台湾佛教最大の道場の開祖となった。

大師は布教する際、以前と異なる様々な方法を採用した。

例えば、佛教歌の制作、合唱団を組織する、佛教講座を開設するなど、迅速かつ容易に人々に佛教の最も基礎的な教義を理解させた。さらに組織の維持のため、佛光山の出家者に威儀を厳しく求め、佛光会を創設し、信徒の忠誠度と参与度を高め、佛光山が安定的に発展していく重要な基礎をつくった。信徒組織の基礎ができた後は、自然に社会の指導者層に重視されるようになり、多くの政治家、芸能人などが大師の信者となった。

このような相互補完の効果の下に、佛光山は急速な発展を遂げることができ、今に至るまでなお、台湾最大の佛教道場となっている。

佛光山は、特に信徒育成や慈善事業に力を入れており、信徒は、慈愛の精神で他の人々を助け、功德を積むことを目指している。

日本国内の佛光山寺においても、多くの信徒が日々寺に参り、自分の出来る事で、無財の布施を行なっている。「車を洗う人、トイレの掃除をする人、厨房で料理をする人」など、それぞれの持ち味を活かして無償の行為がお布施となることを実践している。

ある信者さんによると、「佛光山も当初は大変な時期があり、そんな時一生懸命に頑張っている法師さんたちを見て、法師さんがかわいそう何とか助けてあげよう」と、慈悲心を導きだす大きな要因となった。

一九八〇年代は、ちょうど台湾社会は、経済の発展隆盛の時期にあたり、知識教育もすでに一定の水準に達し、社会の一般大衆が経済的基礎を得たのち、心の安寧、抛りどころを求めるようになり、また宗教信仰活動に参加する能力を有するようになった。これら道場の発展は、ほとんどすべてメディアや、科学技術を駆使し、文化の力を採用して、布教の手段としている。

現代台湾の社会構造や観念の変遷を反映しており、人々に、より広汎な影響があったと思われる。

さらに一九八〇年代、台湾の女性出家者に重要な変化が生じた。それは高学歴の「女性出家者」が出現したのである。日本を始め世界各国へ留学し、台湾佛教の伝播と共に国際的舞臺での活動に大きな役割を果たした。

その要因として、佛教は、彼女たちに生活の意義と事業の機会を提供し、また社会的地位を保証した。これまで、高学歴だが、事業面における発展が制限された女性たちを、自然とひきつけることになった。

それからの出家女性は、男尊女卑の性差別による制限を越え、一般女性よりも多くの発言権と主導権を得ることが

できた。

比丘尼としての生活はおそらく、台湾父系社会において、独身女性にとつて最も有利な一種の社会空間といえるであろう。

世界的に見ると、台湾佛教は、女性出家者の数が著しく多く、なおかつ尼僧の資質が高く、活動力があることで有名である。

このように、比丘をはるかに凌ぐ人数の比丘尼が存在するというのは、おそらく漢伝佛教史上空前の現象であろう。これら比丘尼のリーダー的特質は出家女性の台湾佛教界における地位が日増しに高まり、佛教を發展させ人々をひき付けるきっかけとなった。

台湾では、急速な経済發展や伝統的な思想「人間佛教」などの影響により、社会の人々の中に「社会参加佛教」としての実践が深く浸透している。

その背景には、一例として「企業、一般家庭においても、利益を得た場合には、社会に還元する」という台湾古来の救済の理念があり、今回の東日本への支援につながったのではないだろうか。

台湾佛教では、災害時に仏教団体が国家に先駆け、公共性を有するさまざまな支援活動を実施することが一般的なことと言われている。生者に対して慈しみを持つように教育することに、佛教の精神が入り込み影響を与えている。平時においても、台湾の出家者、信徒たちは、国際的視野での救済事業が広く展開されている。

宗教団体によると、こうした支援活動は、自らの信徒関係者のみならず、一般社会の人々からも支持され、多くの人々がボランティアとして参加し、義援金、救済物資が佛教寺院の下に結集され、それぞれ独自の災害支援を実施す

ることが可能になっている。

一方、日本仏教の現状は、長い間「檀家制度」に経済的基盤を依存し、主として「死者」への慰霊、葬儀など法要儀式を中心として守り続けられてきた寺院にとっては、社会のグローバル化による、急激な変化、社会構造の変化は、制度の疲弊を加速し、少子化や若い世代の宗教離れなど深刻な事態が生じている。

本来、宗教者は「救済の理念」に基づき、当事者に寄り添うことの出来る立場に有り、その慈悲心の実践への手立てや知識を当然持ち合わせ、慈善事業を展開する事に繋がるはずである。

しかしながら、日常日本人の宗教に対する考え方が「慈善」に繋がらない原因は一体なんであろうか？

これは、日本の仏教に対する社会の人々の長い慣習の影響なのか。

佛教信仰者として今後の大きな課題である。

先週の日曜日十七日に、台湾での総統選挙が実施された。

事前の予想通り、民進党の女性候補である蔡英文氏が当選した。

この背景には、多くの女性の支持を受け、さらには、若い世代の支持層を得ることが出来た結果であろう。

この社会の流れにより、今後、より高度な知識によって、女性の進出にも大きな影響があると思われる。

日本仏教もこれを契機に共に発展していくことを望んでいる。